

古高取通信

平成30年 5月

私たちは、活動の四本柱を基に、まちづくりに貢献することを目指します。

1. 活動の拠点を創る
2. 古高取の知識を深める
3. 古高取の魅力を伝える
4. 次世代へつなげる

古高取を伝える会会報



目次	
古高取の魅力を伝える	2
活動の記録	3
古高取紹介	4
なんでも掲示板	5
お宝紹介	6

資料館を待望する

「古高取を伝える会」結成してからは、十年を経過いたしました。

高取焼発祥の地として、宅間窯開窯四百年を記念したイベントが成功裏に終わり、その余剰金の受け皿として本会が発足したものです。子ども焼物教室に用途を限定した十年の活動で、一応の責務を果たしたことになります。その間、子ども焼物教室を中心に、高取焼の学習、情報発信など、十年の成果は確実に市民に浸透してきたのではないかと思います。

ただ、「古高取を伝える」と言っても、何をどう伝えるのか、それぞれの異なった想いを戦わせることなく、今に至りました。

それぞれの想いを、皆で議論しこれからの十年の指針をはっきりする必要があるのであるかも知れません。

そして、直方市民がまちの歴史を知り、誇りに思う、まちづくりに欠かせない核づくりに取り組んでいきたい。

さらに、なかなか実現へ向けての一步を踏み出せない、資料館建設への想いを、今年度こそ、強く発信していきたいものです。

隅田 知明

古高取の魅力伝える

高取焼宗家を訪ねて

古高取を伝える会 石光 秀行

高取焼宗家は、筑前黒田藩の御用窯であった高取焼の高取八山の流れを汲む窯です。

高取焼は、慶長五(1600)年、現・福岡県直方市郊外の鷹取山麓に築かれた「永満寺宅間窯」に始まると言われていきます。この永満寺宅間窯を築いたのが高取焼始祖、八山です。初代・八山(八歳重貞)は、士分に取立立てられ、筑前国に入部した黒田長政公より、鷹取山に因んで「高取」の姓を拝領しました。高取姓となつてから、八山は慶長十九(1614)年、内ヶ磯に移り、「内ヶ磯窯」で十年製作しました。雄渾な作風から、次第に瀟洒で洗練された作風となつていったのは、この窯の後半です。



十三代 高取八山

その後、初代・八山は白旗山(現・飯塚市幸袋)に窯を移し、同地で生涯を閉じました。

二代・八歳貞明は、寛文五(1665)年、上座郡鼓村(現・高取焼宗家住所)に移り「鼓窯」を築きました。さらに、四代・源兵衛勝利は、享保元(1716)年、早良郡籠原村(現・福岡市早良区)に「東皿山窯」を開き、一年の内半年は鼓窯に滞在して双方で製作を行う「掛勤」を行います。以後代々、明治四(1870)年の廃藩置県まで、この掛勤が続きました。

現在の宗家は、廃藩置県の後、昭和三十二(1957)年に十一代・静山が再興し、十二代、十三代と引き継いでいます。

このように、永い伝統によって培われた高取焼の技術は、秘伝書として残され、一子相伝によって伝えられました。

私は今回、初めて宗家を訪ねましたが、それは歴史を感じ、認識を改めることになりました。

まず宗家は、山や川・田んぼに囲まれた静かな場所にありました。話しを伺いながら案内して頂くと登窯のすぐ裏にある山からは、木材や土などを採りだし、川の水を



初代 高取八山の墓



釜床一号古窯跡

利用した唐臼で陶土を挽く。田んぼでは、藁灰釉などを作ったのだろうと四百年前の生活を勝手に想像してしまいました。そして、その作業の多くが現在でも行われていると言うことに感動しました。

また、すぐそばには釜床一号古窯跡(鼓窯)の史跡や初代・八山のお墓、古窯のあった各地域の神々を祭った神社など貴重なものも見ることができました。

続いて、十三代のお話しですが、十三代は、幼少期より十一代・静山から陶芸などを教わり、子供ながらに伝統を受け継ぐという思いが強かったそうです。そして大学卒業を期に、平成二年より一年余り大徳寺派廣徳禅寺において修行。帰窯後、高取焼古窯跡の発掘陶片を元にして研究、作陶に勤められました。

平成十年、遠州流茶道宗家 小堀宗慶御家元より庵号「無一庵」を頂

戴し、平成十二年に高取焼宗家十三代・八山を襲名されました。

作品は、現在も長石や陶土を唐臼で搗き、登窯や穴窯によつて焼成するなど伝統技法は変わることなく、一味の違いへのこだわりを持ち続け、茶の湯の器という用の美への探求一筋に歩み続けておられます。

先祖の偉業を受け継ぎ、斯道探求に精進し、先人に恥じない作品を造りあげてゆかなければならぬ、と強く念われています。

そして歴代の作品なども見せて頂きましたが、それは私の認識を改めさせるものとなりました。

また、高取焼と茶の湯との深い関わりも感じる事ができ、私にとつて有意義な時間となりました。ありがとうございます。

最後に、昨年の九州豪雨被害の爪痕はまだまだ残っていました。裏山のブルーシートや田んぼの土砂など早急な復旧が必要です。

皆様、ご支援・ご協力の程、宜しくお願い致します。

高取焼宗家 十三代 高取八山

〒八三八一-一六〇二

朝倉郡東峰村小石原鼓二五一一

電話 ○九四六一七四一・二〇四五

FAX ○九四六一七四一・二八五五

活動の記録

●子供焼物教室（お茶会）

（平成三十年一月～三月）

場所：直方市内の小学校

毎年、「マイ茶碗」作りが終了すると、各小学校では二月・三月に「マイ茶碗でお茶会」を行っています。私も参加しています。小学校六年生の子達は、いつも目を輝かせて茶道の歴史、お茶の作法の話など聞き抹茶を点てる体験をします。

初めての体験の子が多いので、



緊張した様子もお菓子を食べ抹茶をいただく顔がほころびます。

菓子は中学校へ飛び立つ子達へ、和三盆の鶴と春の琥珀を用意して心ばかりのお祝いとしています。

日本の伝統文化である茶道を通して、「マイ茶碗」の大切さを感じてくれたら、とても嬉しく思います。

今年も全小学校でお茶会が無事終わり、新六年生の「マイ茶碗」作りが始まります。

来年の二月・三月にまた「マイ茶碗でお茶会」のお手伝いができ、子ども達の笑顔に出会えることを楽しみにしております。

田中紀子

●現地見学バスツアー

～波佐見中尾山地区を中心に巡る～
（高取焼基礎研修講座）

（平成三十年三月二十九日（木））

集合：直方市中央公民館 九時出発
行程：やきもの公園（野外博物館「世界の窯広場」）～陶芸館「観光交流センター」（くらわん館）二階波佐見

焼の歴史資料を展示し、昼食し花見しだれ桜（田ノ頭）～中尾山「交流館」～観音堂（天井画）～中尾上登窯跡国史跡～展望所～帰路

参加：二十一名
会費：五千円



当日は絶好の桜日和、参加者二十一名は、行く先々で満開の桜を堪能しました。

最初に「やきもの公園」を見学しました。公園の中には野外博物館「世界の窯広場」があり、古代から近世にかけての世界を代表する珍しい窯が十二基再現されています。景德鎮の窯はもちろん、韓国、トルコ・・・穴窯、蛇窯、登り窯、など当時の窯が移築されたり、復元されたりして、その構造なども詳しく説明が書かれています。初めて目にする外国の窯は形がユニークで、とても新鮮でした。

陶芸の館「観光交流センター」（くらわん館）には波佐見焼の作品が数多く展示されて窯元の多さにびっくりしました。

次に、足を延ばして田ノ頭の「枝垂桜」見物に行きました。薄いピンクの花が斜面に流れるように咲く姿に皆さんうっとりしていました。

午後から陶郷・中尾山を散策しました。陶郷と言われるだけあって、川の両側に窯元がたくさんあります。川上の中尾山交流館で、波佐見焼を見学し、その後世界最大級の登り窯跡に向かいました。途中小さな観音堂によりました。

観音堂の天井には江戸時代に描かれた百二十枚の日本画があったそうですが劣化し、最近、花鳥風月、竜の絵が絵付師や地元の芸術家によって描かれ新たに復元されたそうです。観音堂の狭い境内は、郷の人々が斜面を削って子供たちのあそび場にした跡だそうです。平地の少ない所での知恵と子どもたちへの思いやりが伺えます。

上登窯跡は内ヶ磯窯跡のように長い斜面にありましたが、なんと長さ一六〇m、三十六室もある巨大な登り窯。やつと上った最高部には、音声ガイド付きで当時の窯跡が一部保存展示されていました。

天保元（一六四四）年から昭和四（二九二九）年まで長く使われたそう
うで、庶民向けの器「くらわんか手」や海外輸出用の醤油や酒を容れる「コンプラ瓶」が生産されていた
たそうです。当時の勢いとエネルギーが
伝わってきます。上登窯跡は現在、国
史跡に指定され、整備中ですが見学
可能です。

高台からは満開の桜とひしめく瓦屋根と
突き出たレンガの煙突が見渡せました。
ゆったりとしてみどかな景色ですが、いざ歩いてみると
これまた大変。郷は結構な坂ばかり
です。平地がありません。重い土や石、
茶碗を担いでこの坂を行き来してい
たのかと思うと当時の仕事をしていた
人の苦勞が偲ばれます。

巨大な窯跡に驚き、桜に癒され、陶郷の人々の努力に感動したバス
ハイクでした。

倉田豊子



中尾山上窯からみた町並

古高取紹介

古高取内ヶ磯窯跡の

発掘調査報告書から

副島邦弘

今回は、原点にもどってみたい。古高取内ヶ磯窯跡は、茶道具の手もの
と、日常雑器を同時に焼いた窯です。
その大半は日常雑器で庶民が使う物
で、大量生産をする藩営の大きな窯業
の工場である。

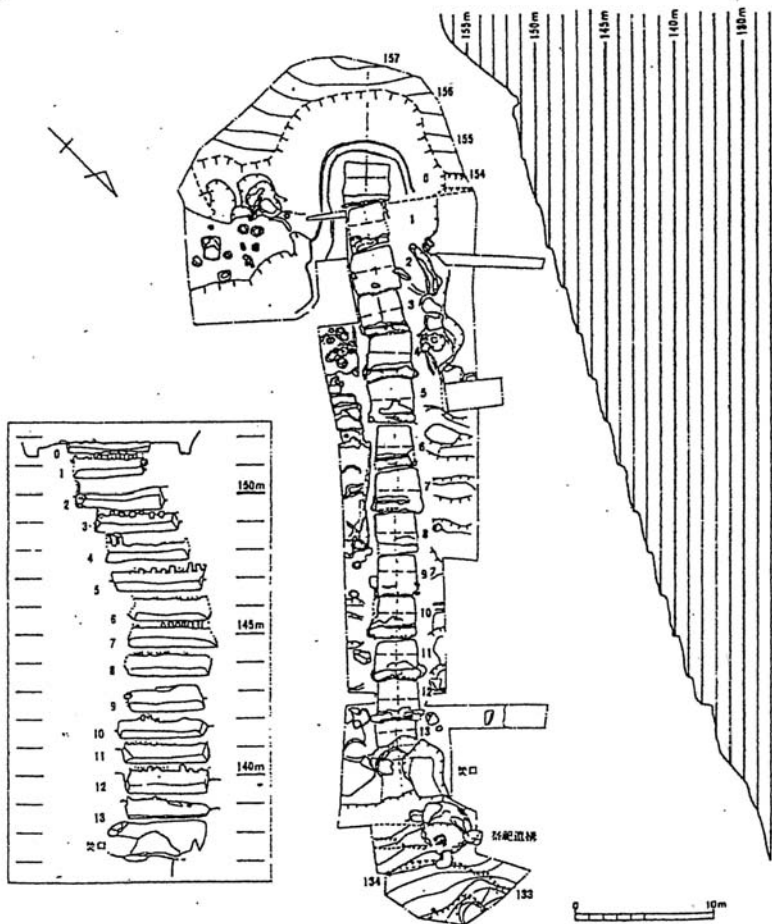
窯の全体の地形図と平面図を合わせると、
地形は舌状に大きく北に張り出した位置
にある。窯尻は地山を東西14m、南北6m
を扇状に削平し中央部に窯尻を置き、この
開削作業は窯尻部のみばかりでなく、
東側でも行われ平坦部を確保し、作業場
として機能させている。調査によつて窯
尻から焼成室14室と焚口を合わせた全15
室より成る連房式階段状の登窯である。
諸般の状況で、従来の報告書と異なり
窯尻を0室とし、焚口に向かつて順に室
番号を付けている。全15室より全長46
・5mと長大で焚口から窯尻の0室ま
での比高差15m、また、焚口部と前庭部
の比高は1・5m、窯尻と開削部との比高
4・75mを測る。主軸をN-41°

―Eにとり、傾斜角19°になる。

出土遺物は、土囊袋に換算して1000袋以上
に達する。その七割程度を日常雑器の
挿鉢・片口類が占める。大部分の遺物
は窯尻のテラス部、焚口北側前庭部の物
原部および、窯周辺部の物原から検出
されている。遺物は陶器・磁器・互・銅
・鉄製品のほか、窯積に使われていた
シジミを置き台に興味を引くものである。

(注)

古高取内ヶ磯窯の発掘調査は、昭和54～56（1980～1982）年の3ヶ
年は、直方市教育委員会が実施。その
後、平成7～11（1995～1999）年の5
ヶ年は、福岡県土木部河川開発課が原
因者負担で実施した。出土遺物は4000
袋以上を検出されている。直方市と県
教委を合計すると5000袋以上である。
換算は土囊袋111パンケース1で計算
している。



なんでも掲示板

●中泉小学校でお茶会

～高取焼マイ茶碗を使って～

〔平成三十年三月五日(月)〕

場所：中泉小学校 家庭科室

中泉小学校は、卒業を目前に迎えた六年生に対し、お祝いの意味を込めてお茶会を開催されました。

講師は地元中泉在住の中村先生他三名で、子供達は茶道の作法に触れ、体験することを通して伝統文化に触れました。

また自分で作った「高取焼マイ茶碗」を使ってお茶を味わい、誇るべき直方市の歴史への理解を深



めることもできました。最後に感想を発表して、楽しいひとときは終了しました。

●里山においでよ

(金剛山もとり保全協議会だより)

〔平成三十年四月〕

場所：金剛山もとり広場

本年度から直方の自然公園(風致公園)として新たな出発をします。

荒れた里山も丁寧に人の手を入れて見違えるように蘇りました。市民の皆様の里山にとの思いが強いですが、コツコツと進んでいけば結果はついてくると信じて長年関わって来ました。

人の手を入れ保っていかねばすぐ又荒れた里山に戻ってしまいます。



古高取を伝える会は二〇一〇年発足から団体の会員として参加しています。

今後ともよろしく願います。

本年度の主な行事予定は、以下の通りです。

■六月九日(土)～七月一日(日) あじさい園開園

■七月二十九日(日)

ちよつくらふれ旅 陶芸体験 (古高取を伝える会)

■八月四日(土)

ちよつくらふれ旅 野外遊び体験 (金剛山もとり保全協議会)

■十一月十八日(日)

ちよつくらふれ旅 紅葉散策 (金剛山もとり保全協議会)

●子供焼物教室とお茶会

〔平成三十年三月九日(金)〕

場所：下境小学校

平成二十九年六月十六日に、下境小学校六年の子供焼物教室に初めてサポートとして参加させて頂きました。高学年の子供と接する機会が少ないので多少緊張しておりましたが、子供たちの笑顔とふれあいながら、私も楽しくなってきたのを思い出します。各人が思



い思いの作陶を楽しんでいたように感じました。

平成三十年三月九日に再び下境小学校へ、今度はお茶会のサポートとして参加させて頂きました。六月に子供たちが作った作品に釉薬がかけられ、焼きあがった姿を見てうれしく思いました。

自分の作った焼物でお茶を頂くという一連の流れは、物を作る喜びや物を大事にするという事にもつながると思います。これから卒業という新たな門出を祝うに相応しい体験になったのではないかと思わせて頂きました。

田中縁

